

# 吉田遺跡第1次 発掘調査報告

1989

財団法人 東大阪市文化財協会

## 例　　言

1. 本書は、大阪府住宅供給公社が予定している吉田府営住宅建設に伴って実施した吉田遺跡の試掘調査報告書である。
2. 調査は、東大阪市教育委員会の依頼を受けて、財團法人東大阪市文化財協会が大阪府住宅供給公社の委託を受けて実施した。
3. 調査は、財團法人東大阪市文化財協会福永信雄を担当とし、本書の作成は福永が、遺物実測及び整図は津田美智子、奥村正美が行った。
4. 検出した中世の水田上塚の花粉分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して行なった。
5. 調査の実施にあたって、大阪府建築部住宅建設課、大阪府住宅供給公社から多大な協力を得、大阪府教育委員会文化財保護課中井貞夫・久米雅雄氏よりは、調査について有益な指導・助言を得た。また、調査にあたって、岩野英明、大庭正義、永吉清満、上村忠則、中野善典、遠藤里香等の参加を得た。記して心より謝意を表する。

## 目　　次

I.はじめに	1
II.位置と環境	2
III.調査概要	4
1. 調査方法と目的	4
2. 調査経過	4
IV.遺跡	6
1. 層序	6
2. 遺構	13
V.出土遺物	15
VI.吉田府営住宅建設に伴う試掘調査によって採取した土壤の花粉分析報告	18
VII.まとめ	22
写真図版	23~28

## I.はじめに

大阪府住宅供給公社は、東大阪市吉田島ノ内98-5番地他において府営住宅の建築を計画された。計画地は、弥生時代以降吉田川内湖の縁辺にあたる地と考えられている場所で從前、遺跡として周知されている場所ではなかった。しかし、開発面積が約30,000m<sup>2</sup>と大規模であり、計画地の東約300mに水走道路、南約700mに植葉道路が最近あいいで地下深くより発見されていることから未知の遺跡の存在する可能性も考えられた。

そこで、大阪府教育委員会では、遺跡の有無を確認するための試掘調査を事前に実施するよう大阪府住宅供給公社に対し指導され、これの実施を東大阪市教育委員会に要請された。東大阪市教育委員会では、調査方法等を大阪府教育委員会と協議の上、調査の実施を本協会に依頼されることになった。本協会は、これを受けて大阪府住宅供給公社と試掘調査の委託契約を結び、昭和63年4月18日より6月22日まで現場調査を実施した。その後、出土遺物などの整理を平成元年3月31日まで実施した。

試掘調査の結果、後述するように、計画地の東半分で中世の水田と畔塹を検出し水道構が存在することが明らかとなり、地名を取り吉田遺跡として今後周知していくことになった。以下、本報告でも吉田遺跡と呼称する。

本来表題を試掘調査報告とすべきであるかも知れないが、上記のように遺跡として周知するようになったため、1次調査と称して報告することとした。



第1図 調査地位置図

## II. 位置と環境

吉田遺跡は、河内平野のほぼ中央、現在の地名では東大阪市島ノ内に所在する。国土地理院発行の1/25000の地形図「大阪東北部」では、右下端付近にある。現状は西半分が区画整理の実施された空地となり、東半分は木造の大阪府営住宅が建つ。この付近は、先頃までT.P.1m前後の低湿な水田地帯であったが、最近大規模な区画整理事業が行なわれ様相が一変した。

遺跡の北側には、国道308号線が走りその上に近畿日本鉄道「生駒線」が近年開通した。区画整理が進み鉄道が開通したことから、市域で今後最も開発が進むと予想される地域である。

宝永元年（1704年）の大和川付替以前、旧大和川の主流の一つである玉串川は現在の柏原市・八尾市を北流して近畿日本鉄道奈良線「花園」駅付近で東西二つに分流し、東側は吉田川、西側は菱江川となって弥生時代に存在した湖「河内湖」の後身である深野池・新開池に注いでいた。本遺跡は玉串川の分流地点の北約1.5km、両川の自然堤防の後背地に位置する。

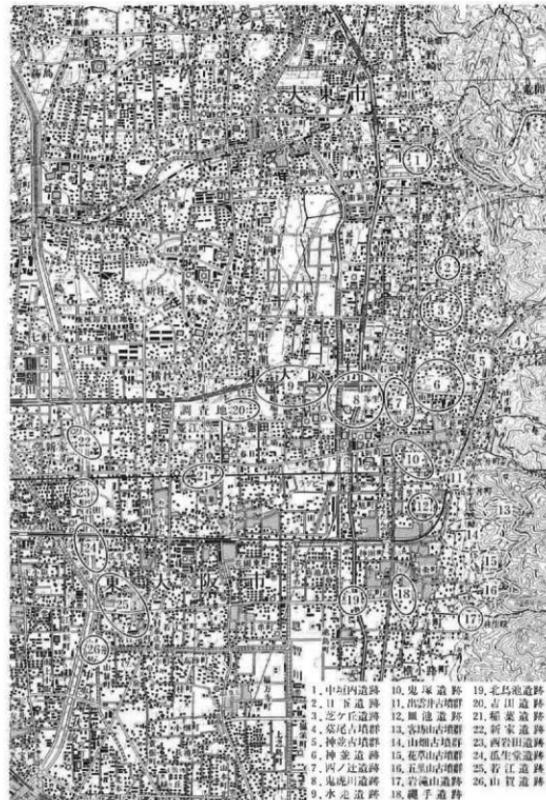
この付近は、若江郡と河内郡の郡界にあたり、旧石垣次氏の河内郡・若江郡条里の研究によれば、今回の調査地のはば中央を南北に流れる水路「五箇井路」が郡界となっている。もとよりこの郡界が、奈良時代にまでさか上るかどうかは不明ながら、江戸時代以前のある時期から存在したことはまちがいない。江戸時代の本遺跡付近には、吉田川の自然堤防上に今米村・吉田村・菱江村の自然堤防上に菱江村・稻葉村などが存在した。当時、今回の調査地の若江郡に入る場所は菱江村、河内郡に入る場所は吉田村に属していた。

本遺跡の南0.8km、玉串川の分流地点の北側に稲葉遺跡（縄文時代～中世）、東0.8km吉田川の東岸の自然堤防上に水道遺跡（縄文時代～中世）が所在する。旧河内湖の縁辺にあたる地域であるため、旧石器時代から中世までの遺跡の存在する山麓部や、内陸部の楠根川沿いの地域などに比して遺跡の分布は密でない。特に菱江川と吉田川に挟まれた地域では、現在の所、稲葉遺跡が存在するにすぎない。稲葉遺跡の報告された調査成果にもとづき、本遺跡付近の土地利用の状況を簡単にふれておきたい。

稲葉遺跡は、調査地内及び周辺で弥生時代前期より中期後半まで集落が存在したことが判明している。その後、後背湿地となり古墳時代中期末から後期初頭までの短期間に水田の存眷が想定され、以降平安時代後期まで、時に水田として利用されながら氾濫原と湿地的な環境が交互に繰り返されたようである。平安時代後期（11世紀代～12世紀代）に秦里制に規制された地割による水田開発が行なわれ、鎌倉時代（13世紀前半）に洪水によって埋没するまで使用された。その後、室町時代（15世紀後半）に前田と同様の地割をもつ大規模な水田開発が行なわれ現在に続く。江戸時代には畠地も存在した。

吉田川と菱江川の流路は、13世紀前半以降に形成されたものである。萩原氏が指揮された郡界にあたる歩路は、中世の自然河川の東肩部分に重なることである。

稲葉遺跡の変遷は、立地からみて、本遺跡の推移を考える上で、重要である。両遺跡とも、玉串川の氾濫におびやかされながらも、各時代の人々が耕地化の努力を絆けた所といえよう。



第2図 周辺道路分布図(1/50,000)

### III. 調査概要

#### 1. 調査方法と目的

今回の試掘対象地は、すでに区画整理が実施された南北に長辺をもつ「L」字形の土地で幅約6mの道路により、4つのブロックに囲まれていた。そこで、各ブロックを北よりA・B・C・D地区と仮称した。前述した都界の五箇井路は、C・D地区の西端近くを南北に流れる。

調査は大阪府教育委員会の指導を受け、各地区の中央付近に1箇所ずつ平面5×5mの範囲に鋼矢板を打設し、この付近の地山が存在する現地表面下5mまで、盛土を除きすべて人力で掘り下げて調査を行なうトレンチ4箇所と、機械と人力を併用して平面4×5mの素掘りトレンチを26箇所以上、任意に設定して実施する計画で当初調査を開始した。しかし、盛土が予想以上に厚かったとの土層にもあまり大きな変化が認められなかつたことから、素掘りトレンチに関しては平面を10×9mに拡大し計21箇所のトレンチを設定して実施した。素掘りトレンチも盛土は機械で掘削したが、以下は一部の深掘りを除き人力で掘り下げた。各トレンチは調査を実施した順に、第1～第25トレンチと呼称した。

今回の調査の目的は、從前遺跡が周知されていなかった対象地において遺跡の存在の有無を確認することを第一とし、次いで弥生時代以降河内側の縁辺にあたつているかを、確認することとした。

対象地周辺の河内側縁辺と考えられる地で、最近相次いで発見された稻葉道路・水走遺跡などとの比較も目的の一つとした。

#### 2. 調査経過

現場調査は、昭和63年4月18日に資材を搬入し、翌日から開始した。遺構・遺物の検出も少なかったことから同時に併行で3ないし4箇所のトレンチの調査を行なった。以下、主要な調査経過を記載する。

4月26日 第1トレンチ第5層（上部砂層）中より瓦器・土師器の細片出土、この砂層が中世以降の洪水によるものと判明。

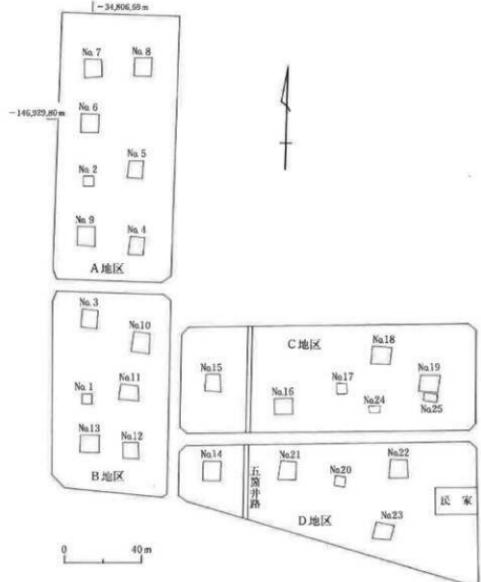
4月28日 第4トレンチで第5層の下面、第6層（暗青灰色シルト混り粘土）上面に不鮮明な足跡検出。人間の歩いた跡であることは確認できる。

5月6日 第5トレンチの第6層中より瓦器（13世紀前半）の細片1点出土。同層中よりシミなどの貝も出土。中世の沼状の堆積と考えられる。

5月24日 第6トレンチ第9層（下部砂層）の下面、第10層（黒色粘土）上面で、イノシシ・シカなどの動物のものと思われる7cm～5cm前後の足跡を検出。黒色粘土中には、アシなどの植物遺存体多量含まれる。第9層中より壊滅した須恵器と土師器の細片出土。

6月14日 第13トレンチより噴砂検出。寒川旭氏の教示により、1510年の地震による可能性が高いことがわかる。

6月16日 第21トレンチの第5層下面より、東西方向の珪藻1条を検出。水田面にも人と思



第3図 トレンチ位置図

われる足跡多数存在する。ヘラ状木製品も1点出土。

6月17日 大阪府教育委員会文化財保護課の中井係長、久米技師が調査状況を視察に来訪され、珪藻の出土状況から調査地の東半分を中心に水田遺跡として周知するよう指導を受ける。

6月21・22日 第22トレンチ第5層中より完形に復元できる瓦器碗1点（図14）出土。

6月22日 第21トレンチの断面より水田の珪藻等の花粉分析用サンプルを採取する。その後保存のため、水田面にグランドシートを敷き、遺物取り上げ済の砂を用いて埋めどしを行ない、現場を撤収する。

## IV. 遺跡

### 1. 層序

調査対象地は、約30000m<sup>2</sup>と広大であったが、堆積環境が安定した低湿地ということからいくつかのトレンチ間で少し異なった層序も認められたが、大きくみれば、極端な変化は少なかった。そこで、基本層序を模式化して設定し、説明することにしたい。その後、各トレンチの層序図を掲げるのが、良いのであるが、上述のとおり、ほとんど土層に変化のないものも多い。そのため、紙数の都合もあり、主要なトレンチの断面図を掲載した。

#### 基本層序

第1層 盛土 厚さ1.5m前後である。区画整理にともなって盛られたもので、各トレンチによって厚さに若干の差がある。上面の標高は、T.P.2.5m前後である。

第2層 耕土 厚さ10~20cmで、トレンチによっては、盛土をする際に削平を受けて存在しない。第12・13・19トレンチでは、上下2層に分層できた。

第3層 暗灰色砂質粘土(末土) 厚さ10cm前後で縦の根に伴うとみられる鉄分の沈着が認められる。第12・13トレンチより、遡れから近代の瓦・陶器壺の小片出土。

第4層 暗黃灰色粘土 厚さ30~40cmで第3層と同じく鉄分沈着が認められる。第12トレンチでは、上面に落ち込みが認められた。

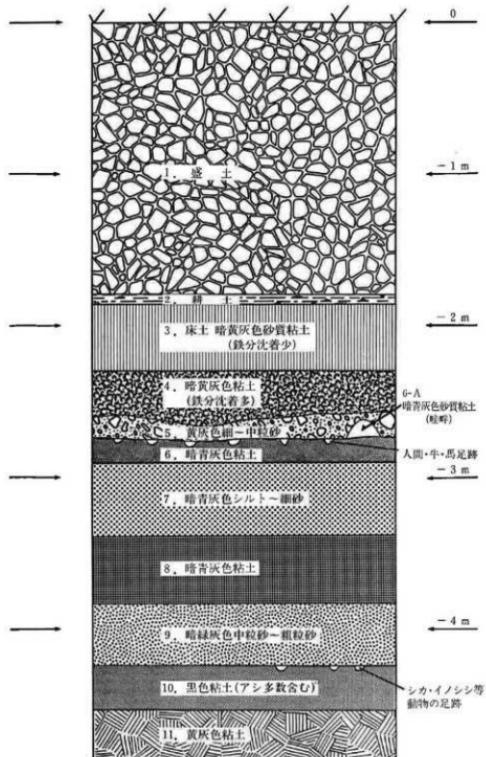
第5層 黄灰色細砂から中粒砂(上部砂層) A・B地区で厚さ32~88cm、C・D地区で厚さ28cm~100cmである。第7・12・15トレンチでは存在しない。第6・8トレンチで北東の刷毛を、第10・11トレンチで南東の刷毛を検出。C・D地区の第16・18トレンチなどでは、厚さ4cm前後の暗青灰色シルト質粘土が間層として1ないし2層認められた。上部器の断片と13世紀前半から中葉に属する瓦器碗出土。A・B地区とC・D地区の砂層とも出土遺物などからみて相似た時期に洪水によって堆積したものと考えられる。

第6層 暗青灰色粘土 厚さ30~50cm前後、A・B地区ではシルト質粘土になるトレンチ(第1・2・5・4)も認められた。シジミなどの貝を含む。上面の標高はT.P.0 m前後で第1トレンチのみT.P.-0.3mである。第1・13・16トレンチでは、この層の下に第9層の下部砂層が存在する。第21トレンチのこの層の上面で、咲咲及び足跡を検出した。足跡は、他のトレンチでも認められた。13世紀前半に属する瓦器碗の小片1点出土。

第6~8層 暗青灰色砂質粘土 第21トレンチで咲咲を成す土層である。追構の項で詳述する。

第7層 青灰色シルト~細砂 厚さ20~60cm。B地区には、第10トレンチを除いて存在せず、シルトから細砂層に変わり、第13トレンチでは<sup>砂</sup>砂となって第5層まで貯蔵している。またA地区は、貝を少量含む暗灰色粘土に変る。

第8層 暗青灰色粘土 厚さ12~40cm。A地区第5・6・8・9トレンチ、B地区第10トレンチ、C地区第17・19トレンチに存在し、D地区では第23トレンチなどに存在する。



第4図 基本層序模式図

貝や植物遺存体を中量含む。

第9層 暗黄灰色細砂から中粒砂 厚さ28~80cm。すべてのトレニチに存在するが、色調はA地区が、暗黄灰色~黄灰色、B地区青灰色~暗青灰色、C地区、D地区が灰白色と変化する。層厚は、C・D地区で厚く、砂の粒子も粗い。これは、東から西に向って砂が堆積したことを示しており、玉串川の前身の河川による氾濫によって堆積したと考えられる。土師器・須恵器の細片が出土した。須恵器は、7世紀前半に属するものがある。

第10層 黒色粘土 厚さ24~64cm、上面の標高は、A・B地区の境でT.P.-1.4mとやや凹み他はT.P.-1~-1.2m前後で、ゆるやかな起伏をもつ。多量のアシなどの植物遺存体含む上面でシカ・イノシシなどの動物のものと思われる足跡を検出した。C地区の第18、19、25トレーナーは、貝を含む暗灰色シルト質粘土が存在し、下層は、ヒシの実を多量に含む暗緑暗灰色砂層である。この3トレーナー付近に、黒色粘土を切って河川が存在したことを見出している。

第11層 黄灰色粘土 厚さ150cm以上。平野部で通有の地山層である。上面の標高は、T.P.-1.7m前後で、ほぼ平坦と考えられる。アシなどの植物遺存体は、第10層に比して少ないが、上部には少量認められ下部ほど見られなくなる。

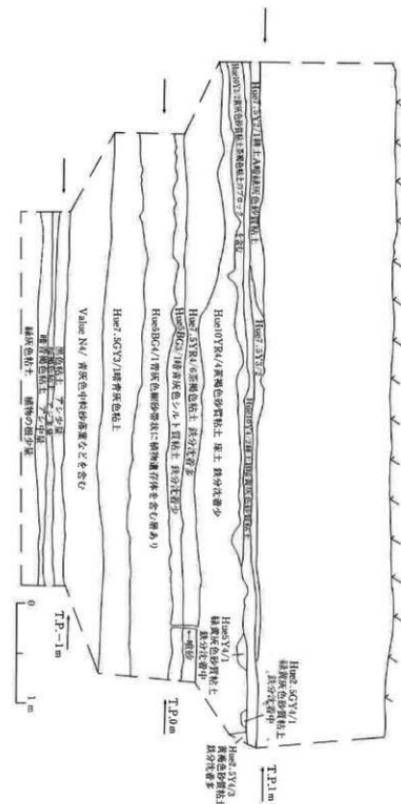
各層の所蔵時期は、出土遺物などからみて、第3層が近世～近代、第4層中世～近世、第5層鎌倉時代（13世紀前半～中葉）、第6層鎌倉時代（13世紀前半）、第7・8層奈良時代から平安時代、第9層古墳時代後期（7世紀前半）、第10層弥生時代前期から古墳時代後期、第11層绳文時代晚期と考えられる。

七

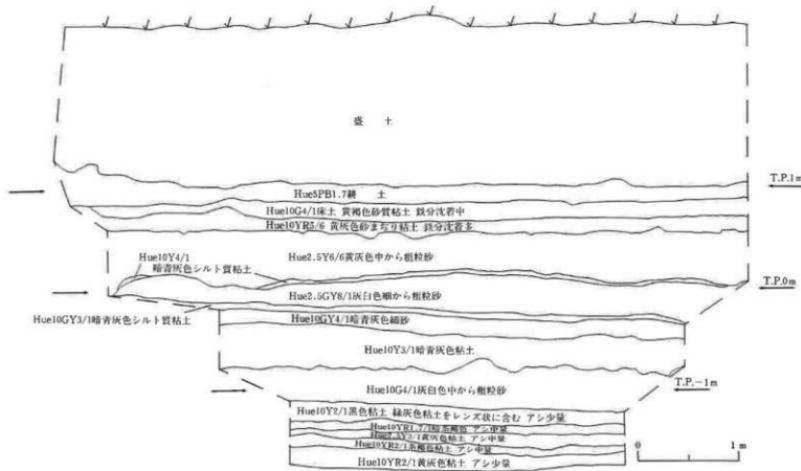
- (1) 伏田昭次(1973)「河内郡・若江郡奈良の復元」『池島町の奈良遺構』東大阪市道路保護調査会 P17-29

(2) 中井貞夫他(1986)『楠葉遺跡発掘調査概要』、I、大阪府教育委員会

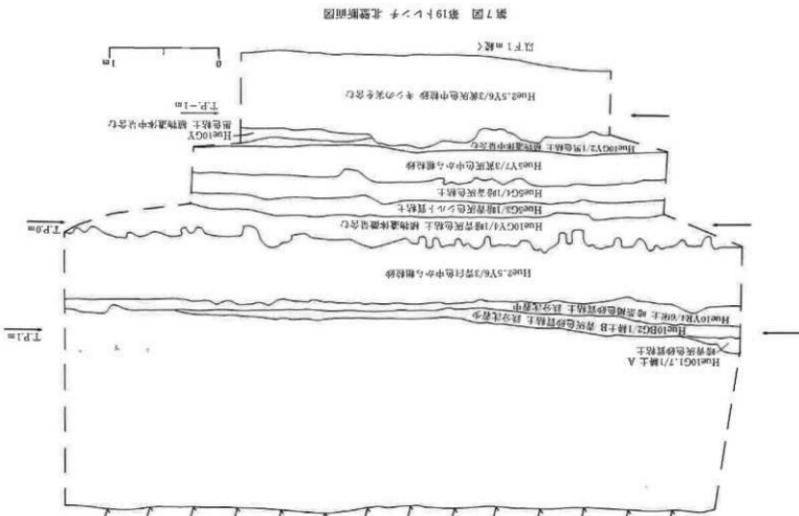
(3) 通商産業省資源調査所寒川組の御教示を得た。記して謝意を表す。



第5回 第13トレンチ 北壁断面圖



第 5 図 第16トレンチ 北壁断面図



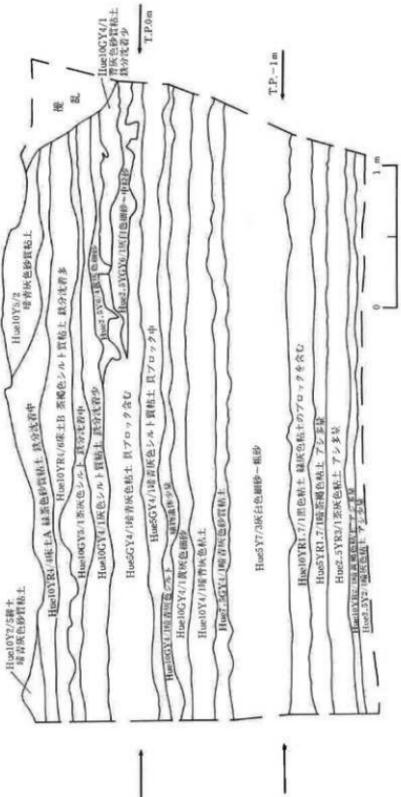


図8 第20フレンチ北壁断面図

## 2. 遺憾

今回の調査で検出した道標は多くない。滝池・溝・畔咲である。滝池は、近世～近代にかけてのもので、第18トレンチで一画を検出した。道標ではないが、自然河川の肩を第6・第8・第10トレンチで確認している。また足跡も、第6層上面で不鮮明なものも含めばは全てのトレンチで検出し、第6トレンチなどでは第10層上面にシカ・イノシシ・トリと考えられる足跡も検出した。

## 第15トレンチ

溝2条を第4層の青灰色シルト質粘土上面で検出した。溝は2条とも東西方向に走るものである。溝1は、幅1m、深さ0.2mで長さ5.2m以上を有する。トレンチの北側で検出した。断面は、隅丸の逆白形を呈する。底面の標高は西端でT.P.10.16m東端で0.14mで西から東にゆるく流れようである。溝の内壁は、黄緑色シルトで、鉄分の沈着が少量認められる。

講2は、トレーナーのはば中央、溝1の雨肩より約0.4m離れて検出された。幅0.5m、深さ0.12m、長さ5.2m以上をはかる。断面は逆台形を呈する。底面の標高は西端でT.P.0.18m、東端でT.P.0.16mで溝1と同じく西から東にゆるやかに流れる。溝内の堆積土は溝1と同じで同時に堆積したものと思われる。検出した層からみて中世から近世にかけての耕作用の溝と考えられる。

なお、トレンチの南西端で、これらの溝より切り込み面からみて新しい(近世)と考えられる落ち込み1を検出した。長軸3m以上、短軸0.8m以上で堆積土は二層に分かれ、上層は鉄分沈着の多い茶褐色砂質粘土で、下層は緑灰色砂質土である。

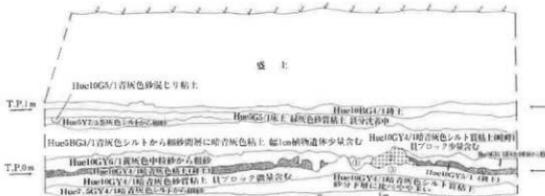
これらの遺構からは遺物はまったく出土しなかった。

## 第21トレンチ

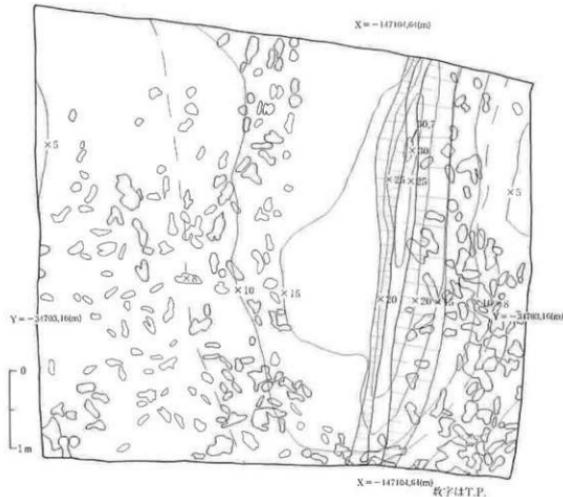
珪畔1条と足跡を検出した。珪畔は、トレンチの北よりも東西に横切る形で存在する。下幅0.8m、上幅0.24m、高さ0.28mの断面は古形を呈するしっかりしたものである。最上部は西よりも標高T.P30cmで東に向うほど低くなり標高T.P10cmである。珪畔を構成する土は、第6層の暗青灰色粘土と第7層暗青色シルトを盛り上げたものと考えられ、暗青灰色シルト質粘土である。第6層に含まれる貝のアーロックも少量みられる。珪畔の北側には足跡が認められたが、南側には存在しない。

耕土は、第6層の上面に厚さ12cmの暗褐色粘土層が認められた。第5層は、耕土上を覆っている。耕土上面に足跡は多數認められた。足跡は、明瞭なものではないが大きさからみて人間のものが多いようである。少数は、大きさからみて牛あるいは馬と考えられるものも存在した。水田の上面の標高は、T.P.8~10cm前後であり、畦畔より兩側の方が僅かに高い。耕土中より稻子状木製品1点が出土した。

咲畠及び水田の時期は、第5層が13世紀前半と考えられることからほぼ同時期と思われる。上層で、咲畠が検出されていないことから、上記の時期に短期間水田として利用されたものの玉串川の氾濫によって埋没したため、中世末から近世に至るまで、耕作地として利用されなかったものと考えられる。



第9図 第21トレンチ 西壁断面実測図



第10圖 第21トレンチ 駒形・足跡平面図

V. 出土遺物

前述したように、本遺跡は水田地であるため出土遺物は多くない。完形に復元できたのは、図14-16の瓦器類だけで他の細片である。復元できたもののほとんどを複製した。遺物の内訳は、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦と竹子状木製品がある。特に植物遺存体としてヒシの実や木実も出土した。以下、種類別に出土トレーナーと検出層を付して解説する。

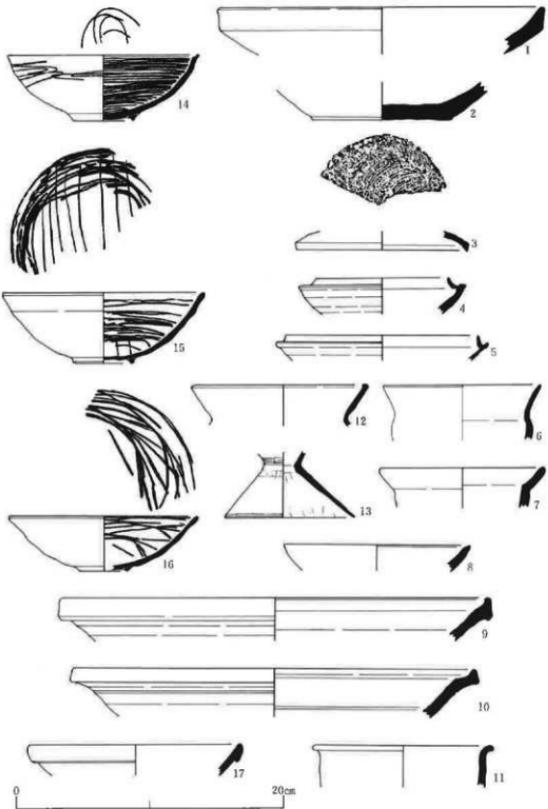
土師器(図6・8・12・13)図12は、盤の口縁部である。口径13.2cmで口縁端部を内側に肥厚させる。胎土に長石、金雲母を含み内面は棕褐色、外面には薄い棕褐色を呈する。第5トレーン第5層出土。図6は、小型灰窯の口縁部から体部にかけての断面である。口径は11.7cmで調整は準則の為不明。胎土に1mm以下の長石、金雲母などを含む。内面は棕褐色、外面は黒褐色を呈する。第16トレーン第3層出土。図13は、小型器台の脚部・杯部の一部を残すものである。脚部は「ハ」の字形に開き、裾端部は丸くおさめる。裾部径は9.7cm、同高さは4.8cmで脚部外面は横方向のハケ、杯部外面は横方向のヘラミカキで調整する。胎土に金雲母などを含む。内面には薄い黄褐色、外面には黒褐色を呈する。第8トレーン第9層出土。図8は、杯の口縁部である。口径13.9cmで口縁端部内面に1条の沈線をめぐらす。調整は準則の為不明。胎土に1mm以下の長石、金雲母、クリドマなどを含む。第4トレーン第3層出土。

図6・12・13は布帽式土器で、古墳時代前期（4世紀代）に、図8は、古墳時代後期（6世紀後半）に形態からみて属するものである。

須恵器(図2-5-9)図2-9は、東播系の鉢跡である。図2は底部式で口径10.4cm、底外部には、静止系切目が残る。胎土はやや粗く雲母、長石などを含む。内面は焼いて暗赤褐色、外面は淡赤褐色を呈す。第12トレンチ第3層出土。図9は、口縁部式で口径31.8cm、口縁端部を上下にわざかに拡張する。胎土はやや粗く金雲母と白・黒色の砂粒を含む。色調は灰白色を呈する。表採資料。図3は杯形の縦縫部である。口径12.7cmで、口縁端部はわざかに上下に拡張し角ばって終る。焼成は良好で胎土に長石などを少量含む。色調は灰白色を呈する。第21トレンチ第5層出土。図4-5は、杯身の口縁部である。口径19.8cm(図4)14.3cm(図5)で、2点ともたしかりがり、矮小化しており、受部は外上方にのびる。焼成は良好で少量の長石などを含む。内外面とも灰色を呈し、摩滅している。図4は第19トレンチ第5層出土。図5は第6トレンチ第9層出土。

図4・5は陶邑編年のTK209～TK217型式に属し、古墳時代後期（7世紀前半）、図3は同じくMT21型式に属し飛鳥時代（7世紀後半）に属すと考えられる。

瓦器(図1・7・14・16)図14は、口縁端部内面に1条の沈線をめぐらす「太型」の瓦器である。口径14.3cm、高さ4.9cm、底径4.4cmである。高台断面は三角形で体部内面に密なミカギ、見込部に粗い連続輪郭線ミガキを施す。体部外面上半も分割性の残るミガキがみられる。騎士に、微細な長石・金雲母を含む。内外面とも暗紅色を呈する。第22ランched第5層出土。図15・16は「和泉型」の瓦器である。図15は口径15.0cm、高さ5.3cm、底径4.1cmで高台



第11図 出土遺物実測図

- 16 -

断面は逆台形を呈する。見込部に8条の平行線状ミガキを施す。胎上に、微細な金雲母などを含み、色調は内外面とも黒灰色を呈する。第19トレンチ第5層出土。図16は、口径4.1cm、高さ4.1cm、底径3.6cmで、高台断面は三角形を呈する。体部内面に粗いミガキを施す。胎上に微細な長石・金雲母などを含み、内外面とも灰褐色を呈する。第12トレンチ第3層出土。図1は、壺体の口縁部で口径4.2cmである。胎上に2~3mm前後の長石を含み、内外面とも灰黑色を呈するが、摩滅が激しい。第12トレンチ第3層出土。図7は、土管の口縁部である。口径22.2cmで、内外面とも灰黑色を呈するが、やや摩滅がみられる。第21トレンチ第3層出土。

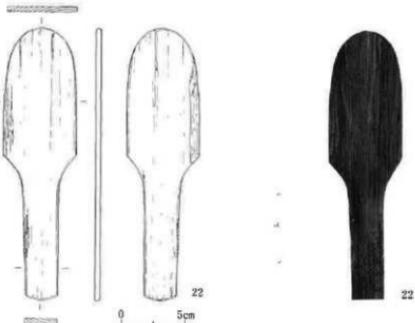
図14は鎌倉時代(13世紀前半~中葉)、図15は鎌倉時代(12世紀後半~13世紀前半)、図16は鎌倉時代(13世紀前半~中葉)、図1は室町時代末期(16世紀後半)、図7は江戸時代に屬す。

陶磁器(図10・11・17) 図10は、唐津系の碗の口縁部で口径30.0cmである。第11トレンチ第3層出土。図11は唐津系の碗の口縁部で、口径13.1cmである。内外面に緑黄色の釉がかかる。第21トレンチ第3層出土。図17は、白磁碗の口縁部で口径15.7cmである。内外面に灰白色の釉がかかる。中国からの輸入品である。第8トレンチ第3層出土。

図10・11は江戸時代(17~18世紀)、図17は平安~鎌倉時代(12世紀後半)に属す。他に江戸時代(18世紀代)の見込部を軸はぎた伊万里系の染付碗が2・3層より少量出土している。

木製品 柄子状木製品の完形品が1点(図22)出土した。長さ21.2cm、幅5.7cm、厚さ0.4cmのものである。縦木取りで作られ、ていねいな削りを施すがノミ痕はみられない。市内出土の類例は、若狭遺跡に有る。第21トレンチの13世紀前半と考えられる水田耕土より出土。

遺物は、室町時代末期から江戸時代以降のものを除くと大半は砂崩内よりの出土で、摩滅したものが多く流れ込みによって遺跡内に埋没したものと考えられる。



第12図 柄子状木製品実測図・写真

- 17 -

## VI. 吉田府営住宅建設に伴う試掘調査によって採取した土壌の花粉分析報告

### 1. 試料および目的

試料は、吉田府営住宅建設に伴う試掘調査にともなって採取された土壌4点（No.1～4）である（表1）。これら4点の試料のうち、No.1・2・4は中世（鎌倉～南北朝）の水田とされる部分より採取されており、No.1が水田耕土、No.2が畦畔、No.4が床土に相当する。No.3はこの水田の下位にみられた貝化石を含む自然層から採取されたものである。今回の分析は、試料中に含まれている花粉・孢子化石の種類構成を明かにすることで、この水田における稲作の様態について検討することを主目的とした。

### 2. 方法

試料の秤量（湿重13g）、フッ化水素酸処理→重液分離→アセトリス処理→水酸化カリウム処理の順に物理・化学処理を行い、花粉・孢子化石を抽出する。抽出残液をグリセリンで封入し、プレパラートを作成し、光学顕微鏡下でその全面を観察し、種類（Taxa）の同定・計数を行った。また検出されたイネ科花粉については、ノマルスキー微分干渉装置を使用し、表面の模様を観察し、大きさ・芽孔の形態なども考慮しながらイネ属と他のイネ科に区別した。

### 3. 結果および考察

結果は、表1に示した。花粉・孢子化石が良好に検出されたNo.3・4については、花粉化石群分布図を作成した（表2）。出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が穂花粉、孢子から不明花粉総数を除いた数をそれぞれ基準として、百分率で算出した。

#### （1）化石の産状について

花粉・孢子化石の産状は、以下の通りである。水田耕土とされるNo.1ではシダ類胞子化石が多量したが、検出された花粉化石は少なく外膜が壊れている（薄くなっている）ものを持んでいた。畦畔部分とされるNo.2では、花粉・孢子化石とともに少なく、僅かに検出された化石のほとんどは、外膜が壊れているものであった。一方、床土とされるNo.4とその下位の自然層No.3では、化石が良好に検出された。

このような各試料における花粉・孢子化石の産状および保存の違いは、堆積当時の微地形・堆積環境や堆積後の経年作用の違いに起因すると考えられる。花粉化石は、好気的な環境では化学的に酸化分解し、また土壤微生物（糸状菌・放線菌・細菌など）によっても分解することが知られている。No.2は畦畔堆積物とされることから、水田耕土に比較して好気的な環境にあったとも言える。そうだとすれば、No.2で化石が少ないのは、土壤微生物や化学的に分解したことと意味していることが推測される。また、水田耕土とされるNo.1で花粉化石のみ少なかつ

た点は、畦畔より保存され易い環境にあったことが想像されるものの、堆積物中における花粉・孢子の分解過程に関する研究も少なく、現状ではどの程度の分解の作用を受けたかなどについて究明するのは困難である。今後の研究課題である。

#### （2）稲作について

栽培植物とされるイネ属花粉は、自然層とされるNo.3で2.9%、耕土とされるNo.4で13%検出された。鈴木・中村（1977）は、現在の水田表層堆積物のイネ属の産状について調査を行い、花粉分析の結果イネ属比率（総イネ科花粉数に対するイネ属の比率）が30%以上を示す層面では周辺の稲作が行われていたと見なしてよいと考えている。今回の分析結果について、この見解に基づいて検討を行う。No.3の自然層では、イネ属の出現率は低く、またイネ属比率も20%と低いことから、当時、稲作農耕が行われていた可能性は低いと判断される。現水田耕土では、耕作等の人为的擾乱によって花粉が下方に移動するとされていることから（鈴木・中村、1977）、自然層とされるNo.3より検出されたイネ属花粉も上位の水田耕作等に伴う擾乱によって下方移動し、二次的に堆積した化石である可能性もある。ただし、ここで検出されたイネ属が全て擾乱によって堆積したものであるとも断定はできない。現水田耕土の調査によれば、散布されたイネ花粉の残存率は散布地帯で100分の1程度で、その多くが水田外に流出・堆積することが指摘されている（鈴木・中村、1977）ことから、同層堆積当時調査地周辺の稲作が行われていた地点から流出した花粉が本地点に運搬・堆積した可能性も考えられるのである。いずれにせよ、本層の堆積時刻などを含めた検討作業が必要となる。また、本試料からは畑作物であるソバの花粉が検出されているが、直上のNo.1からも検出されている。イネ属花粉と同様に上層から移動してきた可能性と、堆積当時周辺で栽培されていた可能性の両者が考えられる。

No.4の水田耕土では、イネ属の出現率が高率になり、イネ属比率も45%を示すようになる。また、カヤツリグサ科などは減少する。これらのことから、本地点において稲作が行われていた可能性が高いと判断される。また、自然層の項に多かったカヤツリグサ科などが減少することは、稲作に代表される本地点近辺の開発が進行した状況を示唆するとも考えられる。また、隨伴する水湿性のイボクサ属・ミズアオイ属は、近年まで水田雜草として良く知られた種類であることから、当時も水田雜草として生育していたことが想像される。

なお、No.4・3の木本花粉の相成割合はほぼ類似していることから、周辺の台地上の植生はほとんど変化せず、黒葉樹のカシ類などを主とする林が成立していたものと考えられる。また、マツ属・コナラ亞属などは二次林を構成する種類であること、道端内で水田耕作が行われていたことなどから、中世（鎌倉～南北朝）の頃の道路周辺では自然に対して人類の干涉が及んでいた可能性が推測される。周辺の台地上には、マツ属・コナラ亞属などが二次林として生育していた可能性が強い。

## 引用文献

鈴木功夫・中村 純(1977) 植物花粉の堆積に関する基礎的研究。文部省科新費特定研

「古文化財」『稲作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究－中間報告－』(中村 純編), p.1-10.

種類(Taxa)	試料番号	1	2	3	4	
木本花粉						
モクシ属		1	-	5	5	
ツガ属		1	-	6	4	
トウカエデ属		1	-	2	2	
マツ属		1	-	35	28	
コクサギ属		4	-	4	4	
スギ属		2	-	24	26	
イネ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		3	-	7	27	
ヤマガヤ属		1	-	1	2	
クマザサ属		2	-	2	1	
ハバヒキ属		2	-	3	18	
カバヒキ属		1	-	2	-	
ハバヒキ属		1	-	1	5	
コナラ属		1	-	4	3	
アカシヤ属		7	-	24	15	
クリ属-シイノキ属		16	-	77	55	
シリカ属-ケヤキ属		6	-	14	17	
シキミ属		1	-	1	8	
アカガシ属		-	-	1	10	
トチノキ属		-	-	1	-	
ウツリガヤ属		-	-	1	-	
カシ属		-	-	1	-	
カエデ属		-	-	1	-	
イゴロ属		-	-	1	-	
カキ属		-	-	1	-	
イヨノキ属		-	-	1	-	
トリコロム		-	-	1	-	
草本花粉						
オオダク属		1	-	-	-	
イグロ属		16	-	15	60	
イネ科		4	-	9	72	
カヤツリグサ科		-	-	37	38	
イボガサ属		-	-	-	1	
ミズアオイ属		-	-	-	2	
クワ科		-	-	-	7	
サルシダ科-ウナギカミ箇		-	-	-	1	
ソイ属		-	-	-	1	
アカバナ科		1	-	1	-	
ナシ科		1	-	1	-	
モクシワ科		1	-	1	-	
ババタ科		1	-	2	1	
マイ科		-	-	-	1	
アノニアトウガサ属		1	-	1	-	
セリ科		2	-	1	1	
アキノキリン		-	-	1	-	
オナンジ属		-	-	1	-	
ヨモギ属		10	-	21	16	
クマザサ属		-	1	1	-	
ランボク属		-	-	1	-	
不明花粉		3	1	3	5	
シダ類孢子	165	18	48	22		
シダ類孢子	165	18	48	22		
Botryococcus近似種	-	-	5	-		
合計		49	6	237	235	
木本花粉		10	6	245	203	
不明花粉		3	1	3	5	
シダ類孢子	165	18	48	22		
総花粉・孢子	257	31	323	465		

表1 吉田府営住宅建設に伴う試掘調査採取土壤における花粉分析結果

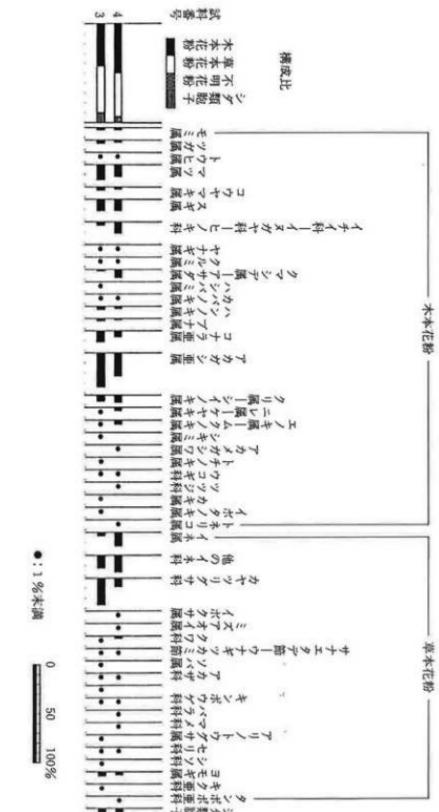


表2 吉田府営住宅建設に伴う試掘調査採取土壤における花粉化石群集の分布

## VII. まとめ

今回の調査で明らかになった点を以下、列記してまとめとしたい。

- 1 調査地は從前、道跡とされていなかったが第21トレンドで畦畔の一画を検出し、鎌倉時代後期（13世紀前半）の水田址が存在することが明らかとなり吉田道跡として今後、周知することとなった。
- 2 調査を通じて、当該地の弥生時代以降の推移が明らかになった。弥生時代は、河内湖の縁辺にあたる地でシカ・イノシシ・トリなどの動物が歩き回るアシの群生した地であった。古墳時代以降奈良時代の間に、玉串川の前身による河川の氾濫に見舞われている。平安時代には沼地に変わりシミなどの貝が生息している。南方に所在する稻葉道跡では、平安時代後期に条里制に規制された地割がおこなわれているが、この地には及んでいない。
- 3 鎌倉時代後期（13世紀前半頃）には、第21トレンド付近に水田が開発されながら、土層の状況からみて長時間存在せず洪水によって埋没している。この洪水は、稻葉道跡で確認されている洪水層の時期からみて同一の可能性が高い。その後、中世末から近世初めに水田となり、現在に至っている。
- 4 第21トレンド検出の畦畔は、試掘調査という性格上、確認範囲が狭いため条里制の地割との関連は不明である。ただ、前述のように奈良時代は水田が存在していないため条里による地割が存在しないのは明らかである。この地が水田に開発されたのは、中世末期以降を除けば鎌倉時代後期の一時期のみと思われる。また洪水によってすぐに放棄されていることや、1ヶ所しか畦畔が検出されていないことから、大規模な開発とは考えられない。
- 5 鎌倉時代後期の水田は、中世に活躍した河内の豪族、水走氏の本拠と考えられる水走道跡がすぐ東に存在することから、この氏族が開発したと考えて誤りない。また、同時期と考えられる足跡（人、馬ないし牛）を各トレンドで多数、検出した。当時、調査地付近を、人やおそらく耕作に使用したと考えられる牛・馬が歩き回っていたことが明らかである。
- 6 上記の水田で採取した土壤の花粉分析の結果も稻が栽培されていたことを示している。微量であるが、ソバの花粉が検出されたことは、周辺に畑の存在も考えられ興味深い。
- 7 第13トレンドで、1510年に起きたと考えられる噴砂が確認された。水走道跡の例よりは、小規模なものであるが、今後平野部の道跡で同様の噴砂が検出される可能性が高い。
- 8 出土遺物は、古墳時代から江戸時代のものがみられるが、量が少なく断片が多い。出土量は、A・B地区よりもC・D地区のほうが多い。完形に復元できたのは、瓦器類のみであった。砂層中よりの出土にもかかわらず、摩滅もみられず水田の存在と相まって近くに聚落の存在も予想される。

注

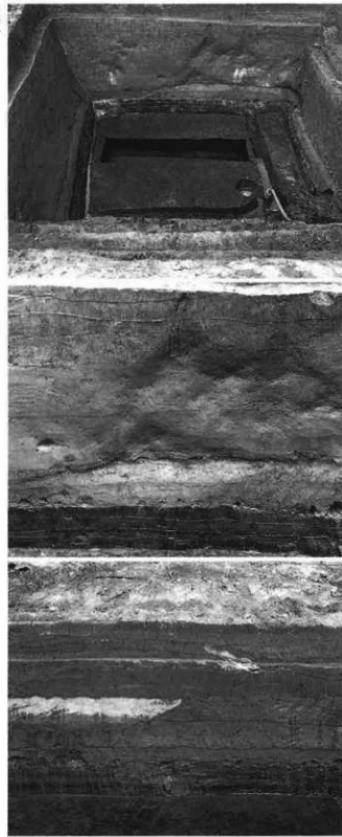
(1)勝田邦夫（1988）「水走道跡にみられる地震の痕跡」『東大阪市文化財協会ニュース』3巻3号。

P25-28

図版1



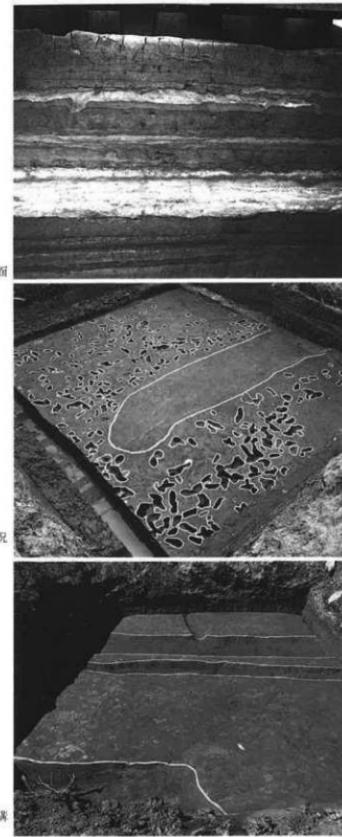
調査地全景 (航空写真)



1. 第7トレンチ 実掘状況

2. 第7トレンチ 東壁断面

3. 第8トレンチ 東壁断面



4. 第20トレンチ 東壁断面

5. 第21トレンチ 崩壊検出状況  
(鎌倉時代後期)

6. 第15トレンチ 耕作用溝  
(近世～近代)



7. 第16トレンチ 牛・馬足跡検出状況  
(鎌倉時代後期)



8. 第6トレンチ シカ・イノシシ足跡  
検出状況(弥生～古墳時代)



9. 第13トレンチ 噴砂検出状況(1510年?)



14



15



14'



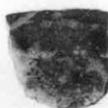
15'



16



9

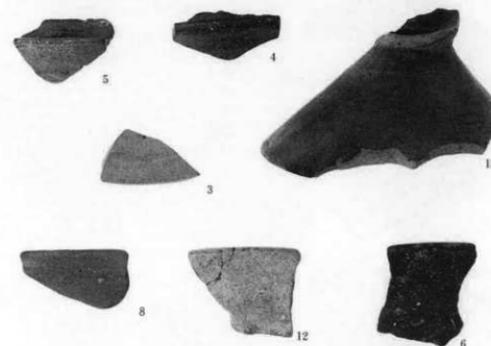


1

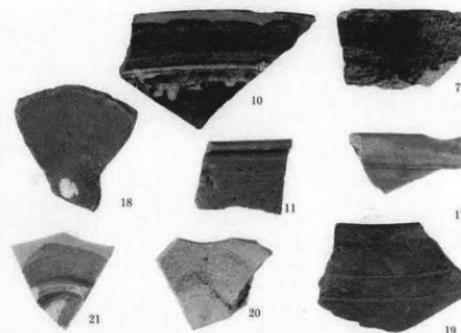


2

瓦器(1・14・15・16) 須恵器(2・9)



1. 土師器(6・8・12・13) 磁器(3・4・5)



2. 土師器(10) 瓦器(7) 中国産陶器(10・11・18・20・21) 輸入磁器(17)

- 28 -

吉田遺跡第1次  
発掘調査報告

1989年12月25日

発行 財團法人 東大阪市文化財協会  
印刷 ドウミ印刷 広研社